

「私の思い出」から抜粋 沢向 福松
大正時代の力キ漁と木材積み出し作業

常呂町高齢者大学「昭和59年度オホーツク大学文集トーコロ」掲載

私の出身地は胆振国浜厚真です。大正5年3月20日に常呂村蠣島（かき島 注：現在の栄浦）に移住しました。その当時、蠣島は人家が2〜3戸でした。

3月の彼岸には鑑沸神社は雪で埋まり、ちょっと頭が出るくらいでした。

鑑沸は木材でにぎやかな街でした。木材は両岸に積み、かき島荘（注：現在の鶴雅リゾート付近）の所まで積んでありました。

春夏秋は彼岸頃まで切れ間なしに木材を積み出しておりました。（略）

私が何万トンもする木材運搬船を見たときには、私はこのような大船を初めて見たので、漁に出るときにはわざと汽船に近寄って通りますと、頭なすと言われたものでした。言われたのも無理ないと思いました。このような大船によって時化遭難することもあります。自分の乗っている船口幅8尺2〜3寸くらいの川崎船なんて、汽船の人には木っ端のように見られたものです。

力キ貝が産卵してしまえますと3ヶ月ほど木材で働きました。当時は汽船2隻しかありません。三笠丸とこんびら丸でした。

私が床丹から木材のイカダ1千石ほどをロクロ巻きにしたこともありました。私はチンカケ船に乗り、600間のロープで巻き、大変忙しいことでした。時化でイカダを壊したこともありました。その頃、蠣島、鑑沸は浅瀬があり、浅瀬に乗り上げないようにするには大変なことでした。櫓をこいで、はやが切れて仰向けに後ろへひっくり返り、足が船の中に入り、体が海に落ちてちょっと忙しい思いをしたこともありました。

私は14才の時から65才まで漁業をしてきました。力キ貝はかき島から鑑沸までで、サロマ湖では私の親父が初めてでした。春になると川崎船で力キ貝を八尺で桁網でとった力キを干し物として仲買人に売り、中国へ輸出したものです。

汐枯れ（注：潮が引くこと）になると、浅瀬の力キ貝を手かごを持って朝食前2時間ほどで磯船にいったい拾った人もありました。

中川さんの前には井戸がありまして、私の家から通路をはさんで浜の方にありました。磯舟で水を汲んだこともありまして。雪解け水が7〜8尺くらいあったと思います。天然力キには変化がありません。

鑑沸9線橋（注：現在のとうふつ橋）の杭には力キ貝が串団子のようについたこともありました。

力キ貝産卵の時には南風が吹いて、暖かい日には米のとき汁を流したようで5寸下が見えませんでした。

12月中旬になると氷の上での力キ採り漁が始まりました。力キ貝は、湧別や網走に馬そりで運搬したものです。

竿は7〜8尺から長いものでは37〜38尺くらいの竿まで使ったこともありました。

当時は家内と2人で1カ月働けば米1俵買って金が残り、生活するには楽な所でした。漁業組合は加藤留五郎組合長でした。ニシンは川畑益造で、あとは漁業はの〜軒が密漁でした。

私は16才の時、白い綿糸で10間ほどのニシンの刺し網を作り、その網でニシンが半箱から7〜8分くらいまでニシンを獲りました。私のニシン漁を2〜3回も見に来た人がありました。この人が古網をどこからか持ってきて、これが鑑沸かき島刺し網の始まりでありました。

私は磯舟で1人曳き力キ貝八尺桁網、これは大変に漁獲がありました。その後、ホタテ貝1人曳き、または2人曳き、または小樽網店から壱百間一寸二十五厚網を取り、それを60間仕立キュウリ魚刺し網に作り、この網で23箱漁獲がありました。

昔はキュウリを焼き干しにして北見方面に送ったもので、高価なものでした。

大正13年にはホタテ貝が豊漁で他船に入漁権を許可し、常呂漁船と共に300隻もの船が帆かけて出港し、朝夕は非常ににぎやかでした。この川崎船には柱4本が必要です。20尺くらいのは矢帆柱で船の前、38尺くらいは風邪が弱い時、25尺のものは風の強い時、18尺くらいは時化の時に必要であります。

加藤組合長の新造船10隻に私の親父も2隻出しました。私の親父沢向春吉は道南では船長でありました。私の兄仁太郎も船頭です。私が22才の時、春吉は40才あまり。そこで私は船頭をしました。が、なかなか理屈を言われるので大変で、仕事ができません。7月の1カ月では兄に漁獲高で負けていましたが、8月には私の伯父や父が何も言わなくなり、大変仕事がいやくなり、漁が終わって2カ月でみると私の方が漁獲で勝っていました。何の仕事でも船頭が2〜3人ではやりにくいものです。

昭和4年には三里が浜の口が切れ、鑑沸口が切れましたが、加藤さんの漁場ポイントの上であり、今まで切ったことのない西で切り、下がパンパンでなかなか口が付きません。1週間もかかり湖口が2つになりました。その後、浅瀬の力キ貝調査の経過で、1坪で2千粒も死滅してしまいました。(略)

※注『常呂漁業協同組合40年誌』から

*大正15年 海扇(ホタテ)が大正12〜13年頃から急激に上昇し、この年は村外からの入漁申し込みが殺到し、その数100隻を超え、組合員着業船と併せて150隻を超える操業で盛況を極めた。しかし、この年の乱獲がたたり、翌年から不漁に陥った。

*昭和4年 4月17日、湧別漁民により、下湧別三里番屋付近に新湖口の開削が決行された。このため湖内の水位が急激に低下し、鑑沸の旧湖口は自然閉鎖の状態となり、牡蠣島付近の牡蠣のほとんどがへい死した。またその他の水産資源も減少し、これから鑑沸地区の衰退が始まった。